

## 『ヨーロッパの学校』

N・ニニーカム 著  
沖原豊・吉田正晴 監訳

これまでヨーロッパの学校について記述された書物は数多いが、著者が何の予備知識もないままに教育現場に飛び込んだために単なる印象記にとどまっていたり書物から得た知識だけでアウトラインを把握しようとしたため制度的なものに限定されてしまったりして、ヨーロッパの学校についての全体像を頭の中に描き出そうとする時、何かこころ一つと思ふところが欠けるくらいがあった。

ところが本書は教職経験豊かなイギリス人がその豊富な語学力を生かして、ヨーロッパの約四十校にも及ぶ初等・中等学校を視察した報告書であるため、従来のものとはちがって、読者に教育現場のイメージをぼんやりなりとも与えてくれる。原題は *Europe at School* で、著者 Norman Newcombe はケンブリッジ大学を卒業し、現在ケイドストーン・グラマー・スクールの副校長を勤めている。内容は、第一章「教育視察旅行の視点」、第二章「学校の組織」、第三章「教育内容・方法」、第四章「教室における授業」、第五章「教師の諸活動」、第六章「児童・生徒の成績評価」、第七章「学校の施設・設備」、第八章「課外活動」、第九章「生徒指導と福利」、第一〇章「生徒規則」、第十一章「教育視察から何を学ぶか」、よりなる多彩なものになっているが、特に「教育内容・方法」、「教室における授業」、「教師の諸活動」の

各章は、経験豊かな著者ならではの記述だと思われるようなかなり入念な、詳細にわたる内容となっている。本書は監訳者が「国際化時代を迎えた日本の教育にとってきわめて有益な示唆を与えるものと確信する」とのべているように、日本の教育学者、現場の教師に大きなインパクトを与えることは事実であろう。われわれはヨーロッパの教育というとすぐ、イギリス、西ドイツの教育ぐらいいか念頭に浮かばないが、本書を読むと今まで思ってもみなかった諸断面を垣間見る思いがすると同時に、われわれ日本人がもっていたヨーロッパ教育の姿がみごとに破壊されていくのが感じとられる。例えば、外来者が教室に入ってきた場合、生徒が全員起立してむかえるとか、制服を着用するとか、視学官が依然として大きな権限をもっているとか、義務教育段階で授業料が必要である国々がかなり存在する、等々の事柄である。ところで本書はイギリス人が書いたものであり、イギリス人の眼でみたヨーロッパ大陸の教育事情であるため、日本人がそれを読む場合、日本的尺度でもう一度読みなおす必要がある。すなわち「いつの場合も、集団のなかでみんな同じとして同質性を追い求めるのは、誤った考えである」という考え方がヨーロッパでは一般的であるのに対し、日本では学級の中にさまざまな質の生徒を集め、一つの同質の集団として機能させていこうとしているため、落第制度一つを例にとってみてもかなりその評価が異なってくる。しかしながら、本書はわれわれが現在直面しているさまざまな問題を解決するための一つの参考例となることだけはまちがいないであろう。

(A5版・三五六頁・第一法規・二、二〇〇円) (田中圭治郎)